

崖下の小舟

Lyrics 2

渚
言址

夜

空間はバラバラに割れて闇夜の中

私はそのパズルを解こうと焦りつつよろけ歩く

蒼白な額に滲む冷や汗と、そして湿った咳が

とげとげしいビルの角と、鋭くそびえる直線に

責め苛まれ、息を詰まらすほどに次々とこみ上げる

襟首をつかみ、引き寄せようとするあの手が

乾いた北風に凍死したアスファルトより伸び

背をかすめるたび、悪寒が私の中に新たな熱を生む

谷間から見上げるオリオンは速度を増して回り始め

神秘であるだけの冷徹な瞬きを地に送るのみ

ああ、天は高く、地はますますに近くなる

ああ、黒いアスファルトがぶつかってくる

*

片頬には鈍痛、片頬には切るような風の咎
身体の表にはアスファルトの冷たい胸がびたり寄り添い
浦には冷気が、死人に被せられる布のように置かれている

このままこうしていれば全ては終り、石となれる
だが、僕の目を覚まさせたものは？

駄目だ、立ち上がれ。僕の目を覚まさせたものは？

見回しても何も変わってはいない、誰もいない
星は冷たく瞬き、ビルは高く、風は舞う

何も変わってはいない。だが、僕の目を覚まさせたものは？
何も変わってはいない、何も、そしてこれから――

これだ、常に全てに横たわっていたものは
そして、僕の目を覚まさせたものは
そうだ、立ち上がれ

(1982.12.11)

ヴアルス

振り子時計が時を拍つと

誰もいないがらんとした部屋に

透明な人々がふっと現れ、踊りだす

アイン、ツヴァイ、ドライ

アイン、ツヴァイ、ドライ

古き良き時代のヴィーンの

着飾った紳士淑女で満杯の大ホールさながら

楽士も踊るが如くの熱演だ

アイン、ツヴァイ、ドライ

アイン、ツヴァイ、ドライ

目を輝かして見守る僕の前に

素朴なひとりの娘がちよつとひざを曲げ

スカートをつまんでごあいさつ

「踊っていただけですか、その御方」

僕らがホールのまん中へ進み出ると

息を切らした人々は僕らを囲んで見守る

さて、ソロ・ヴァイオリンとともにステツプ

アイン、ツヴァイ、ドライ

アイン、ツヴァイ、ドライ

遂には周囲から歌が生まれ

合唱が僕らを陶醉へと包み込む

おお、彼女のリードの何と巧みな

思わず僕は尋ねる

「お前の名前を覚えておくれ」

すると彼女は答える

「……春……」

アイン、ツヴァイ、ドライ

アイン、ツヴァイ、ドライ……、ドライ……

ふと見回せば誰もいない部屋
ガラスの外に、灯りに青く映る残雪
その上にひとつの華やかな到来を見た

(1983.4.3)

サラバンド

影流れ、眩きがもれる
顔を出した湖面の波の上に

光と影の境に風が吹き
浅すぎる春は未だ襟を立てさせる

雑踏から逃れ来て寂しさを覚え
雹に打たれてこみ上げる何者か

典雅に響く旋律はよそよそしく

相反する二つの昂ぶる心にもてあそばれる

骨格だけの原風景に存在を見出し

身体を吹き抜ける頼りなさ

ひとつの枝にとまる鴉のしわがれたひと声も
空しく骨の間をすり抜けてしまう

消えては現れる陽射しの下で僕はくり返す

「何故戻って来た、何故・・・」

(1983.4.3)

パヴァーヌ

揺れるピエロのゆらゆらと

白銀の山稜を歩み下り

孤なる魂と共に谷影へ下り

立ち向かえるは道化のあがきか
慰めは静寂の中に不在か
ただ、情緒の迫り来るに怯える

(何故に孤独に耐える力の無さか・・・)

東に濃紺、西に青の眠りに就く世界の
寂として問いに答えず
内なる微かな焦燥は身悶える

(ヴァイオリンのスタッカートの濡れた滴)

稜線も見えずなりて
秘やかな灯火の下
静止したピエロの紅い笑いが私を見つめる

(1983.4.3)

吟遊詩人

口ずさみつつ歩く泥濘の道

(もう一篇も詩は生まれまい・・・)

草原に満ちる古い歌を背負い

夜にも灯りは持たず

還る、——ただひたすらに帰る

(この広さはどうだ・・・)

知り尽くして後の放浪に

全てが音楽と絵画と情緒である

何もなく、全てが存在する

(・・・)

忘却を欲した時に迫って来る無力

微風は寂しく頬を撫で

古い歌の中から人のぬくもりを感じる

(不可能だったか・・・)

歩み去る人影の肩は落ちて

やがて草の上に座り込む

驚くべきか、表情ひとつ変えず

刀を取り出して切り落としはじめる

自らの手、足、耳・・・

知り尽くして後の放浪に

全ては音楽と絵画と情緒である

何もなく、全てが存在する

(1983.8.11)

葉擦れの地

放浪の業は恐れられ、疎まれ

終には「逃亡」という衣を着せられ

もし留まろうとするならば

*

仰向いた人の目に映るのは

思いがけず瑞々しい希望に伸び上がり

すつくと立っている鮮やかな緑の涼しい姿

腕枕をして野原に寝転ぶ人には

空は限りなく広くすがすがしく

どんな天気にも慈愛を感じる事ができる

さらにもうひと言が付け加えたいという欲求も

今はもう何処かへ、いつの間にか歩み去り

ただ深々と息を吸い込むことが心地良い

うちさわぐ草の海のささやきは慰めを越え

人は切なさを、そして微笑をも越えてゆく

ここは葉擦れの地——再びの出発

(1984.4.17)

夜の前奏

しじまの中にうつむくほどに

しじまの中に哀しみをこらえるほどに

黒い葉影がしなだれかかり

流れる水が私を引き寄せる

しじまの中に見上げるほどに

しじまの中にこらえきれぬほどに

星の瞬きがこぼれ落ち

私からとめどなくこぼれ落ちる——淋しさ

下降するパッセージと跳躍とが

そこここに瞬時、小さな姿を追いかけて

消えてはまた、ふと横手に背後に気配を生じ

私の肩をちよつと叩いてはまた、消えてしまう

ひっそりとガラスのような暗さは涼しく

全ては沈むかに思えるがなお身じろぎせぬまま
ただひとつ聞こえるものと言えば

このしじまと静寂をふれ合う私の息づかい

こうして私は腰を下ろす

こうして私は夜と語り合いはじめる

(1984.6.6)

池

染み初めた楓の透きとほり

見上げては手をかざす

薄紅とこぼれるきらめき

するりと腕を抜ける夢のぬくもり

なびいては力なく身を任す糸に

託す、支えきれぬ蟠りのぬけがら

雨に散り落ちた木蓮の香り

照り映える水に溶けてほのかに揺れ

あなたの足を止めさせる、ふと・・・

行き過ぎて振り返る——まぼろし

見上げては手をかざす

木の間から見えかくれするきらめき

行き過ぎて振り返る——まぼろし

見上げては手をかざす

まどろみへと散る一艘の楓

(1984.10.14)

池

花びらは

降りますね

落ちまして

浮びます

水の底

影となり
揺れまして
こころです

(1984.11.10)

朝まだき

L.
ハーンに

木橋の下
揺れ鏡は
少し寒く
霞み浮び
映ります

青菜負う
懐手して
すれ違い
肩すぼめ
渡ります

(1984.11.10)

協奏曲

シヨパン

少年が駈けてゆく

膝を抱えて草原の上に

軽い風のようなピアノを浮かべ

涼しい姿を追いかける午前

少年は駈けてゆく

染まり始めた葉を透かして

淡いひかりがうつむいている

ひんやりした空気に左腕をさする

幹にもたれかかっている・・・

そっと寄り添ったままの静けさに

囁きかける細流のつぶやきも

風景の遥か彼方をかすかに流れる

肩に感じる温もりに心はやわらぎ

抒情の切なさは旋律となり

一枚の枯葉をふと、ひらりと空へ滑らせる

少年がふいにはじけるように駆け出す

全てを静かに包み込む季節の向こうに

心地良い風のようなピアノを浮かべ

楽しげな姿を追いかける午前

さあ・・・、行こう

(1984.11.3)

協奏曲

消え入るように呟いた御前のひと言を

この混沌とした胸に受けとめ

生命の限り陽光を浴びようとする草々の中へ

身を投げ出した御前にくちづけ

夏雲の切れ間からのぞく

刷毛のような秋の雲と高い空

何処へ急ぐのか

絶え間なく流れるあの雲は

やかましい不協和音の止むことのない

喜びも哀しみも虚構だらけの都会から

逃げ出してこの広さを占領し

思う存分に僕らだけの協奏曲を奏でよう

涼しい秋風は草々をなびかせ

乾いたざわめきを造り出し

何処へ急ぐのか

僕を追い抜いてゆくあの風は

(1985.8)

樹

言葉を忘れた苦しさに
ふと黄色の樹に額をつける
いつの頃からか、それは知らない

溪流が削り取る感情を
取り戻そうと葉擦れに耳をふさぐ
もどかしげに、首を振って

はかない希望が薄れゆき
靄はゆっくと滑りゆく
何かの到来にも思われて

おそろしいほどの無力さに
おおいかぶさってくる美の気配
何故に嬉しいか、それは知らない

記憶を呼び戻すことを思うたび
不安をふるわせて通り過ぎる風の指先

慰めに連れ去られるようにも思われて

逃げ出したいほどにおののいて

ふと黄色の樹に額をつける

いつまでここに居るのか、それは知らない

(1984.11.18)

虫 古典的幻想

ささやく如く虫が鳴く

病に冒された叫びをたしなめるように

擦り傷のひりひりとした痛みにも似て

傍らにただ寄り添って虫が鳴く

胸の奥深く沈んでいる妖艶な女が

無という名の不変の幸福——否、生活を

神秘的な空間として具現するその声に

耳をふさぎ、呻き、喉をかきむしる

操られるように病人は腕を上げて草むらを探り
親指と人差指で虫をそっとつまみあげ

しばらく呆けた眼差しを虫の複眼におくったあと
あくまで等速の圧縮機械のように冷たく潰した

もはや野には一匹の虫もなく、それに代わって

病人のすすり泣きだけが染み渡ってゆく

ささやく如く、何かをたしなめるように

そしてまた、あたりの空間を閉ざすように

そのすすり泣きに耳を澄ますときに聞き分けられなかったか
何か妖しげな女の高笑いらしきものを

(1982.12.5)

冬の日

常に行き止まりの青色の空の下

あまりに多くの感情を背負いすぎた者に
捨て場もなくして世界は息苦しく
背丈ほどもある草の海は埃色に干からびて
有難いことに僕は再び詩が書ける

自由という名の焦燥が幸福を妬み

寝転ぶのもただ逃げ出したいがため

何からと問われても答えることさえ口惜しい

このままここで凍え死んでしまえという思いと
幸福を乗り越えた安穩が欲しいという思いと

果てしない草の海、果てしない風の行方

寒い肩、凍えた手足

全ては冬の澄んだ光の下に温もりもなく
ただ果てしない未来と

行き止まりの生命がふるえてすすり泣く

(1984.12.23)

巨人

春の到来

来り——大いなる響き

耳を澄ましたまえ、家族の者らよ

樵らは思い出すがよい、かの大木の年輪を

全てを養いし遙かなる約束に

敬虔なる驚きの眼差しを注ぎ、黙すがよい

偉大なる権力と慈愛は来り

神々さえひれ伏すその巨人の前に

雪は退き、草木は柔らかに身を解く

扉を開けて招じ入れよ、その夜明けを

汝等が美しき裸身をその陽光に曝せ

(1984.12.24)

復活

「芸術は全て、全く無用である」(ワイルド)

張り裂けるような馬鹿笑いから
鋭いナイフでこの身に直線を切り刻み
生活はいやがうえにもつきまとい
蹴落として今、復活の時

むせ返る蜜の香りに唾をくれてやれば
吸い寄せられて唇は身悶えし
皮肉な笑いをふと洩らせば、耐えきれず
自ら肉体を開き、愛撫を曝す

哀しい侮蔑の衣を身にまとい
虚栄に任せてこれ見よがしにひるがえす
己がふてぶてしく野蠻な狡知に向け
首根を押さえられた数々の欲望に向け

音楽に血を沸かして乳首を噛み
涙しては陶酔の中に放浪い
詩に世界を弄んで羨望を誘い
倦みては新たな無地に色をなすりつける

愚かなるは罪を怖れる者達よ
哀れなるは悲愴を知らぬ者達よ
快樂をくぐり抜けてみるがいい
生活を抱き締めるために

(1984.12.26)

港

昼にはたゆとう海を光の涙と
夢みてかすむ浜辺
遥かなるは憧れに満ち足りた鏡か
今は既に唇をかみしめて
苦い砂
モチーフは髪を吹き
群れなして下らぬ仮面は
我が歩む足をと
抹殺の閃光が消えて後
耐えきれず涙に膝をつく

どんなにしてもただ独りを強いられ
疲れが消え去ることのうとましく
耐え難い波のうねり

ああ、海よ、干上がるがいい

慈愛よ、死に絶えるがいい

破戒の後悔が浜昼顔にうなだれ

生命の重量へ空しい眩き

阿呆面した俗人どもが俺を笑う

自惚れだ、知ったかぶりだ、と

背負いきった者達の辛い結論は

「結局、人生は生きるに価するもの」

俺も歩き出そう、海へと

呑み込むがいい、その深さへと

(1984.12.27)

城

嘆息を連ねる果てしなき海原を三方に

切り立つ崖上

髪をなでる風に血管を切られ

横たはる

面影さえも失ってしまった

この俺から精気を吸い取る

お前は一体何処に居るのか

薄雲から注ぐ数条の光線も

厭わしい世界の茫漠さを思い知らせ

ああ、かつて広さは二人のものであった

風にもせぶ抒情の笛の音とても

今は寂漠の中に孤独をいたぶり――

ああ、かつて静寂は愛する場であった

全てが絶望の中に己が力を捨て去ってゆく

倦怠のうちに波が崖下を洗い

広大な風景の唯中に私は閉ざされ

舌にしみ入る乳酸にのみ生命を浸し

巨大な車輪が天空を横切り

香りのない花園の向こうに雲があり

さらにまたその彼方に弧峰が浮かび
全ては水で薄められて滲んでいる

(1984.12.30)

終点

蛇のぬらりと土を這い
私の目より憂鬱なる力よ
血をたらたらと流せ

コントラバスのぶよぶよと呻き
なま暖き肉体よ、汗の沁みた床に
さらにねっとり涎をたらせ

豊饒の息苦しい濃密な甘さに
呻き、吐き、波打つがいい
毒を盛るのだ、愛という毒を

お前は知り尽くしてしまったのか

馬鹿な、そんなはずはない

凡俗な人間達がこの無を怖れていたなどと

馬鹿な、そんなはずはない

欠伸顔の老人どもの説教が真実だなどと

俺にはもう干からびるしかないのだなどと

馬鹿な、ああ馬鹿な

そんなはずはない・・・

(1985.1.2)

自滅（嫉妬）

神話

彼等の自由にならぬものは何ひとつとして無く

求めれば必ずそれをとらえ

棄て去れば必ずそれを失い

空しきは力よ、寄方ない・・・

勝手にしろと誰もが言っていたはず

貧しき者は幸福いなり

平然と言つてのける

「心の豊かさを」などと

そして祭り上げられた者達は

哀れにも神として温もりの中より放逐され

祭壇の上で己の知と愛を呪い

全人類が豊饒の下に苦しみ呻くを願ひ

群集は恐怖に蒼ざめて口々に叫ぶ

「まやかしの魂だ、焼き殺せ」と

哀れ、神はいけにえと転落して火だるまに

そして群集はこぞって神位を求め

祭り上げられてはまた火だるまに

止まることなき自滅の連続に

天を銅色に不気味に染める

(1985.1.3)

報せ

ぼた雪が廢屋の瓦に沁み溶け
編み込められた生命から
かすかに聞こえる
泥炭の、湿地帯の
遙か北方の孤独の平原を
渡るものもなく
聞こえたように思われたとき
雪は雨に変わり
彼方でひとつの生命が溶け
裸の枝に冷んやりと
滴が映すのは貴方の瞳か
閉ざされた瞼の上に
組み合わされた掌に
再びの雪・・・
赤い血の色が膚に透け
寒々とした鳥のしわがれ声に
淋しい報せを後にして
私は続けなければならなかった

刺絡と放浪とを
私は行かなければならなかった
かすかに明るんだ西の方へ

(1985.1.3)

銀座線

薄よごれた泥水の沁み込んだ階段を
疲れた肩が地下駅へと下り
庶民の痛めつけられた魂が
死に急ぎがちな歩みをこらえ
ポケットの手が切符を握りつぶす

地下鉄は過ぎる、彼等の視線の横を
肩をそびやかす苛立ちと
肩をすぼめる息苦しさ
交わる線路は同じ所をぐるぐると
抜けることも出来ない諦めをめぐり

もがき苦しむ奥なる囚人を押し込め
目を閉じて監視しつつ吊り革にぶら下がり
揺れに任せて映像をぼかし
一瞬の光の消滅にふと身構えて後
扉を抜けて薄汚れた階段を上る

(1985.1.19)

晩冬

肩をすぼめ、痛いほどの冷気に
春への憧れを指してこの街を
ああ、雅歌の流れる時ぞ近し

ゆらゆらと舞い落ちるは祝福の如く
思わずも見上げる教会の尖塔に
ああ、陽光と温もりの時ぞ近し

灰色にうち沈む港の彼方、雲と海
音のことごとくを吸い取る曇天の下
ああ、橋くぐり抜けて漕ぎ出す日ぞ近し

急きたてる者はひとりもなく
ただ微笑をもってその到来を信じ
ああ、色とりどりの花摘む日ぞ近し

毛皮に包まり、雪に足をとられつつ
春への憧れを指してこの街を
ああ、清々しい微風に身を任す日ぞ近し

(1985.2.1)

春の気配

己が脚を鋸でひき
赤い血のしたたる切り口を

既に日は没し、薄暗い夕刻
人々は温かな食卓へと急ぐ

私は街角に立ちつくし
へらへら笑ってその傷口を

人々は目をそむけるかと思いきや
興味津々のぞき込む

ぽつりぽつりと灯りも点り
そろそろ皆んなあくびをしだす

(1985.2.23)

逃亡

自惚れの傷口を押し拡げ
静かなる離反は快楽の周りを
唾棄と嘲笑のうちに酔っぱらい

死ね、死ねと白い頸を絞めるのだ

反逆と形式に蒼ざめた額に

焼きごてにて腐敗の烙印を押し

ただれた皮膚を冷たい雨が揺らし

かじかんだ指が、ああ、もう動かない

何処まで歩けば行き着けるのか

死よりも確かな終末に

感情の消滅、存在の消滅に

生命に追い立てられるのは、ああ、もう御免だ

凍えるような微風に優しくも

氷のような、霧のような雨が

私の生命の証しをことごとく濡らし

貧しく慄えさせてなお、存在を強いる

ああ、行くがいい、この北の平原を

私に死など訪れるはずもない

ああ、行くがいい、何処も同じだ

私に死ねるはずもない

(1985.3.21)

無情

独りよがりの想いが道をそれ

天に消え

私は独りベンチに残り

世界は消え

ただ空気だけが漂い

生は消え

夢の彼方から近付いてくる

私を天に召すための

典雅なアルペジオ

ぼやけた輪郭がゆらめき

かすれた色彩が漂い

希薄な次元が浮かび

存在もなく

愛もなく、意味もなく

ただ微笑だけが満ち

眠りの彼方から近付いてくる

私を抱き上げるための

典雅なアルペジオ

(1985.6.8)

崖下の小舟

鏡に映る己が憔悴の顔をしばし見つめ

断崖にただひとつ建つ掘立小屋の中

疲れきった身体を汚れたベッドに横たえ

窓からは、これは風だ、そうに決まってる

何処からか、海からだ、そうに決まってる

きらきらと、こっちへおいでと誘う海原

小舟は崖の下に、波に揺られて・・・
海は水なのだから光の宝石をきらきらと
あたりまえのようにも、夢か幻のようにもたゆたい

鏡に映る暖かさに満ちた海面をしばし見つめ
遙かに広がり、揺れる粒子の戯れの中
浮き上がるほどの身体を光のベッドに横たえ

小舟は崖の下、波に揺られている
飛び乗ろう、この窓から
鳥のように飛べばいい！

きらきらと、己が美しさを誇らしげに海原は
窓からは、楽しげにはしゃぐ風は
崖の下、波と戯れてうっとりと眠る小舟は・・・

鏡に映る己が憔悴の顔をしばし見つめ
断崖にみすぼらしくも建つ掘立小屋の中
疲れきった身体を汚れたベッドに横たえ

(1985.3.24)

サロン

「さあ、奏いてちょうだい」

紅茶の香りがけだるい腕に
鍵盤は私を押しつけるべく
ああ、何を奏こう

「どうしたのよ、さあ、奏くのよ」

テーブルに寄り集う紳士・淑女よ
故郷は遙かに抑圧につぶれ
ああ、私に何が奏けるだろう

「ろくでなし、奏くのよ」

笑いが鼓膜を突き破り、私は疲れ
咳は胸を破り、息切れがする
ああ、帰りたい――、帰りたい……

「さあ、ポロネーズを」

無理やり両手をつかみ上げられ
鍵盤の上にたたきつけられ
嘲笑の中に私は蒼ざめ・・・

力ない指を嬰ハの上に落とせば
全身の抒情が音となって逃げ去り
人々は私の魂を吸血鬼の如く吸う

豪奢と倦怠の中に人々は陶醉し
私はその中で己が魂を売り渡す
ああ、何のために私は奏くのか

止めようとしても止まらぬ指が
私を絶望の中へ引きずり

ああ、それでも――

ああ、それでも私は奏くだろう

(1985.4.15)

すずらん

血生臭い欲望がこびり付き

洗い流せぬ汚れた体液が

この身をかけめぐる、暗闇に笑いを招き

気狂いじみた密室の解剖に

張りつめた神経梢は繊維を曝し

逆立ちもままならぬ鉄格子を握り

ヒステリックな言葉で己を切り刻み

目まぐるしく空回りする脳髓に敗れ

もてあそぶ赤いボールのゴムの匂い

ふと・・・、風・・・、かすかな大気の流れ

白い小さな鐘が眩く

ああ、———すずらん

すずらん・・・

そして、かすかな

かすかな——風

気まぐれな妖精が浮かび

白い小鈴を時折り揺らし

——すずらん、・・・すずらん

鉄格子の間から腕を伸ばしても

触れることしかできない・・・涙が

その哀しさがどうしようもなく嬉しくて

あそこに鳴っている

風が流れている

すずらん・・・すずらん——

(1985.5.1)

しじま

月もなく、星もなく

しとしとと小雨が落ちる
されど、青白き明夜

白い花びらは道に散り
濡れそぼち、蛍光を放つ
低く垂れこめる雲へと

全ての音は湿った空気に
響きを失って地に沁み
くぐもった呟きをするのみ

葉はまどろみのうちに瞑想し
そっと触れる指先に
うっとりとし身を預けようとする

人為と自然が同居するこの庭に
滴がひとつ果実を結び
世界の向こうでピアノが呟く

単純な、そして

深い湖の底にうす青い
揺らめきがある如く

私はこの道を歩き
知り尽くした時の流れに沿い
新たな暮らしを夜に浮かべる

(1985.6.9)

夏の嵐

空漠たる世界は何故か
ただ動き続けるのみ

感情は汚く淀み
ただ引きずられるのみ

全ては倦怠にぐるみ込まれ
ただ立ちつくすのみ

垂れこめた雲の灰色から吹いてくる
湿気を含んだ空しい未来

細く開けた窓から音を立てながら
吹き込んでくる単調な生活

喜びはおろか、哀しみさえもなく
ああ、行き場のないこの生命

破壊への渴望を沈めんと
息を殺し、狭い部屋の中にうずくまり

積もり積もった無意味な毎日を眺め
ああ、これが人生だとは
ああ、そしてこれが未来だとは

涙を流すことさえみじめに思え
なす術もない平坦さに吐き気がする

夏の激しい嵐さえ乱すことはできない
乱されることを願う私の感情を

ガラスにへばりつく雨粒は私を押し込める
安穩と無意味に満ちた単調さへと

夜明けも黄昏もなく
春も、夏も、秋も、そして冬もなく

情熱もなく、諦めもなく
引きずられるのみの生活、ああ、生活

恐怖と欲望にはさまれたまま
夏の嵐に嘲笑われるがまま
私はただただ耐え忍んでいた
単調という名の試練を

(1985.8.11)

それぞれの毎日

一般への限らない嫌悪が蟠る
ファッションに、誇張された安逸に
受け取ることを拒む人の群れが
漠然と何かを求める瞳を
殊更に自作の虚像へと固定しようとする

遠景を掌の上に乗せ
意識の消えた感情は
希薄な時の流れに微笑する
聞こえていても聞いていない
そんなにも様々な眩きとともに

全てを明確な形状にしようと
堆く積まれた思想の山と
強圧的な希望に取り巻かれ
諦観の故に享樂にすがりつく
選択の苦痛に耐えきれず

喜びを華やかに飾るものもなく
哀しみに襲いかかるものもなく
笑顔はただ穏やかに暖かく
哀しみはあだいく筋かの涙
全てはそつと肩を抱くほどに

運命の決定に対する憧れと怖れ
棄て難い自由と、それとはうらはらの嫌悪
浮遊に似た耐え難い毎日
生活を塗り潰す虚栄の数々
とどのつまりは倦怠と疲労

ひたひたと満ちてくる潮を迎える如く
射し込んでくる陽光を浴び
日々の暮らしと抒情とが
見分けられぬほどに溶け合ってゆく
そつと寄り添い合うように

*

それぞれの暮らしが
それぞれの毎日が
流れてゆく
そして、流されてゆく

(1985.8.28)

オンディーヌ

崖を這い上がる波に抱かれ
笛を吹くオンディーヌは
折り重なるような群雲を急ぎ立て
佇む者の傷心をどやしつける

荒々しい風を招き寄せ
己が髪を流れに浸し
嘲笑をもって慰めを与える
ああ、何と狂暴な優しさ

気休めなど誰が求めよう
耳を澄ませば重い海の上を
高く透明に、細い音色が
飛び過ぎてゆく、遙かに・・・

香りなどありもしない、色さえも

灰緑色——ただひとつ

焦燥も不安も押し潰される

ああ、閉ざされた世界

ああ、閉ざされた世界

孤独と自由が激しく戦う

俺を連れ去ろうと

俺を消し去ろうと

うねりと岩と、そして水

風と葉末と、そして・・・

俺はその狭間に立っていた

笛吹くオンディーヌと語り合いながら

(1985.11.13)

少年

果てしなく改札口からなだれ込む雑踏を
見つめる少年の背は

流れる人々の腰ほどしかなく
その傍らにうづくまる短足の犬とともに
人波に埋もれて見え隠れする

切符を集める駅員は時折り

その犬を振り返っては辺りを見回す
駅長が怒鳴り込んで来はしないかと
いたいけな少年を追い出しはしないかと
雑踏に蹴飛ばされはしないかと

「今日はこんなことがあったんだ」
ただそれを言うために

そして頭をぼんと叩かれたいために
一分でも早く父に会うために
少年は改札口を見つめている

それは伝説になつていたろうか
そんな少年の想いなどは
それは感傷にすぎなかつたろうか
それを見つめる僕の心などは
それは抒情にすぎなかつたろうか

(1986.7.9)

新しい定型

毒は流れず
地を這う北風
通勤の人群れはカサコソと佗しく
切れ切れの陽の光
膝を抱える者は部屋の中
無闇に歩く者は傷口を自ら押し広げ
原子は人の指になびき
全てを増幅せねばいられない
全てを強化せねばいられない

干上がった渴望が足跡となり
せせら笑いも萎び果て
無意味の中を必死で捜し
ふん、それこそが渴いた現代だとは
芸術家という新しい貴族階級の御説

(1988.11.21)

ガラス

青い雨は湖面に降り注ぎ
樹影を揺らす

片々にされた大気の中に
安逸が寝そべる

信じる者を蹴飛ばしてまで
僕は戻るべきなのか

干からびた抒情に水をかけ
空しくも水をかけ

生命とはこれではなかったか
それとも別にあるのか

生きることの哀しみもなく
そして喜びもなく

青い雨は無力に降り注ぎ
私の顔影を揺らす

湖面は生の歩みをあざ笑い
私のみじめな弱さをあざ笑う

「御前にはそれがお似合いだ
せいぜい水をやるがいい
御前が愛し、そして棄てた
その干からびた情婦にな」

私は気付くと青い雨の中
空しくも水をかけていた

(1986.10.28)

大いなる拒否

失意のうちに波は泡立ち
ふと音が止む

こんなにも風は強いのに
カモメはやはり哀しみを捜す

静寂は俺を離れず
漂うごとに水へと沈む

雨上がりの砂浜は陽射しを受け
優しささえもが遠くに霞む

何を生きろと言うのか

今の俺に

無機質な虚栄に閉じ込められ
触れることを忘れたこの俺に

次第に迫る波はただ叫ぶ
帰れ、帰れ、帰れ、と

思い出は失い、そして
未来は平坦だ

けれども帰らねばならない
転調はないのだ

湿地のような芝の原を突っ切り
失った者たちの叫びを背にし

俺は敗れなければならなかった
大いなる拒否の渦の中に

(1987.3.31)

天平

列中の影が長く伸び

波紋が広がる

私は目を閉じ

揺られるがまま

仏像の気魄が扉を開き

襲いかかる視線

満ち満ちた空白

全ては玉砂利の隙間に

滅亡によって生まれ出たものは

洗い流された虚飾

大気との一体化

そして・・・影

私は目を閉じる

抱かれんがため

そっと

抱かれんがため

(1987.4.9)

終日

白い光が空から部屋へ
ピアノは電線を綱渡り
緑の時計はそっぽを向いて
外は多分に風強く

見るものの全ては奥行をもち
それがつまりは少しの哀しみ
涼しい静寂
薄められた色彩

狭い部屋が壁を失い
時間を、そして空間を拡げ
ミクロから宇宙まで

僕は放浪に投げ出される

ああ、悲しむべきは全ゆる生命
太鼓に合わせて嬉々として踊り狂い
はかない樂園を駆け回り
遂にはトロンボーンに震え上がる

道化師の涙は埃にまみれるだろう
ああ、いっそのこと干上がるがいい
全ては夜の中にうずくまっている
たったひとり

うごめき、ひしめき合う者たち
あちこちから鳴り響く行進曲は
てんでバラバラで雑多なリズム
一体どれに合わせたらいいのか

終息はなく、ただ果てしなく
鈍い頭痛が間延びした流れを
粘液のような時に流し込む

ああ、いつそ滝のように落ちるがいい

想う暇もなく

忍び寄る、心臓を波立たせるリズム

絶え間ない変調と変拍子

ああ、いつそ全て無に帰すがいい

最初はさざめくように

そして次第に戦いを始め

ついにはとてつもない騒音へ

その繰り返しばかり

嵐の中に流れる甘美なハープ

穏やかな晴天を裂くヴァイオリン

騒音の中を過ぎる冷たい静寂

おお、母なる大地は何処へ消えたのか

悠久なる夕陽は雲に沈み

掃いたような雲が遥かに消えゆく時

ただその時のみ僕は信じるだけだ

我らの生命の行方を

(1987.4.23)

追悼

「救い、救われこの生命」

ああ、これじゃまるでブラームス
七五調の古典を撫でさすり
破壊は彼の手に余る

「逝去した者への言葉により」

ああ、何と卑怯な陰口か
生きる者へは侮蔑のみ
潔しとは呆れ果てる

「敗れた者の遠吠えを」

おやおやこれは聞こえたか
耳だけはそばだてているらしい

どうかポーズ、取ってはいるが

「赤恥さらして、あえて叫ぶ」

これは殊勝な心がけ

と言いたいところだが

これはそれ、自棄糞に過ぎぬ

「これが私の追悼と思し召し」

急転直下の哀願調

死人に縋れば恥もなし

生きる者には足蹴をくれて

「是非とも貴公の威光を拝借し」

そろそろ本音がぼろり

ここまで我も忘れれば

何も聞こえぬものと見え

「新しきものは古きものからと」

おやおやどうやらこれは

己の詩への言い訳か

これじゃ本当の遠吠えだ

「あの脳足りんの詩人共に」

おっとこれはいきなりの棄てゼリフ

死人には自ら敗れても

生人には敗れたくないと見える

「・・・」

・・・

(1989.1.8)

舞台

暗き淵より這い出し

目をしばたたいて

かき分けた土くれの湿り気が陽光に向け

昇天するその匂い

祈りもない
謳歌する喜びは
声高に・・・
徒に声高に

陽光の明るさが地面にはね返り
瞑想を
衆人の目の中へと引きずり出し
曝しものにする

森は、あるいは枝を打ち落とされ
あるいは伐き払われ
陰なる営みは照らし出され
すごとごと這い出る

「全ては明らかにされねばならぬ」と
不安に満ちた進取気鋭の精神が
地面からばらまく
浸透性の毒液に追い出され

這い出したそこは

ああ、哀れなるかな

瀕死の芸術に郷愁の拍手をおくる者共の
集会場らしい

私は何を求められはしなかったが、観衆は

私が頭を掻けばどよめき

腕を組めば息を殺し

手を挙げればため息をつく有様

馬鹿らしいとは思ったものの

確かに凶に乗ったところもあるにはあった

しかし試してみたくもなるではないか

これだけ当たりを取れば

祈りもない

追い立てられるような満足がのたうちまわり

私は次第に呑み込まれてゆくのを感じた

目もくらむばかりの没落の謳歌に

(1989.2.12)

僕の忘れていたものは

映像だったろうか

僕を今、包み始めたのは

夜のしじまだったろうか

(ああ、光は流れてはいない)

僕を置き去りにしたものは

恋だったろうか

僕を今、迎えに来つつあるのも

その恋だったろうか

(ああ、白いテーブル、白い椅子)

祈りの中に全ては殺され

思い出の前に全ては貶められ

遺された者が啜るものは

ただ、かすかな香りのみだったろうか

(ああ、現在は辱められ)

僕はただ答える

「違う、そうじゃない」

残るものが一体あるのか

それさえ分からぬまま

(現れては消える、ただそれだけだ)

消える――、消す――

それは滅ぶことではなく

沈めば沈むほど現在を

喰い破り

(生きたいのかどうか、それさえ分からない)

抱くことだけしかできない

いずれにせよ

受け容れることしか許されぬ

我等には

(1989.9.9)

岬

波しぶきが作る泡は

生における人間の敗北を思い知らせ

弓なりの砂浜に忍び寄る波は

通い合うべくもない抱擁の哀しみを思わせる

私の怯えきった魂は都会へと後ずさりしようとする

何物も生まれぬ傍観者を強要する夜へ・・・

哀しむことを意識する己を意識するという

果てしない収束の中へ・・・

己以外のものを憐れむことの不能は

私をして目障りな人間の絶滅を願わせるが

このようにしてのみ

人間は滅びてゆくのだと気付く

崩れるかと思える波しぶきは再び海へと合し

慄えるハマボウフウは歓喜にわななくが如く見え

垂れこめた雲は私を閉じ込め

息苦しくさせる

ふとこぼれた鋭い光の剣は私の眼に突き刺さり

思わず瞼を閉じたが、それでも眩しく

両手をかざしてそれを防がねばならなかった――

何故逃げねばならないのかと叫びながら

既に私は己の肉体から逃げ出していた

そして見送っていたのだった

生ある者として帰りゆく己の姿が

次第に小さくなってゆく、その背中を

(1989.12.16)

曇曙

機帆船の海灯が水平線を這い
剥げたペンキに寄り掛かり

日の出は見えず

灯台は虚無を照らす

折れ曲がった地層

雲の下を雲が流れ

その高さを鳥のみにより推る

浜への階段は閉ざされ

ふと気付けば船は港へか

一艘だに見えず

雲間から最初の朱の斜めに

雲の流れにつれ

灯の如くゆっくりと弧を描く

そして空

私は崖を上りつめて360度

西風になぶられて立つ

雲の瓦解

潮の満ち始めて光の乱射し

次から次と白い指の群れが押し寄せ
なまめかしい指先で水肌を愛撫する

(1988.12.10)

北原

カップのふちに残ったコーヒーを
人差指でさっと拭き取り、口に含む
異邦人としてしか生きられぬ私にとっては
御前とても憧れにしか過ぎず

外を見やれば針葉樹から飛び散る葉が
きらめきながら風に乗っている
これが横なぶりの雪に変わるのもあと少し
そして僕がここを下りるのも、もう近い

渴いた肉のわななきの上を這って行った甲虫は眠りに就き
御前が切なく抱いていた、その

僕の腕は既に探り始めていた、テーブルの上で・・・
虐げるための何かを

ひとり歩きしはじめた盲目の嗅覚が

満たされることを嫌悪して速度を増してゆき
御前は息を切らしてそれを追ってきた――
それも終わりだ

下りた後の行く先は決まっていた
御前にも分かるだろう、それこそ

満たされることを知らぬ地
北原だった

(1989.12.16)